

武田泰淳と俳句雑誌『艸屋』の周辺

(附、「『艸屋』細目」および「武田泰淳(沙通)『艸屋』掲載俳句一覧」)

木 田 隆 文

はじめに

このたび、武田泰淳編集発行による俳句雑誌『艸屋』四冊を見いだすことができた。

武田泰淳と俳句のかかわりについては、すでに島野博子が藤田寛随師宛書簡に付された泰淳の俳句の評釈を試みており、^(注1)他にも長田真紀が泰淳の父大島泰信の俳句手帳を紹介するなど、^(注2)散発的な言及がなされてきた。

しかしこれまで、泰淳の俳句活動自体に関してまとまった言及がなされてきたわけではなく、泰淳が俳句雑誌『艸屋』に一定数の俳句を発表していたこと、ましてや編集発行人となっていた事実、たとえば最近上梓された川西政明の労作『武田泰淳伝』(二〇〇四・一二 講談社)にも

言及されてはいなかった。

また後述するが、『艸屋』の刊行期間は泰淳が執筆活動を展開する最初期の段階に該当している。その意味で、同誌に掲載された俳句類は、泰淳文学の成立期を窺わせる一つの資料になると思われる。

以下本稿は、資料紹介の形を取りながら、『艸屋』の周辺に浮かび上がる武田泰淳の文学的基盤を垣間見ようとするものである。

1 書誌的事項

まず『艸屋』の書誌的事項をまとめておきたい。

同誌は、昭和十二年一月一日創刊。発行所艸屋社。

表紙は二七×一九センチ。厚用紙に水車の版面絵(書影

1 参考)。表紙絵の彩色は毎号変化。表紙絵の下に「1」「貳」「参」「4」と号数が付される。本文用紙は二五×一七、五センチ。袋綴じ謄写版印刷。毎号二〇〜二五頁前後。二箇所結び綴じ。同誌の流通であるが、謄写版印刷ということと、奥付に「非売品」と記されていることから、同人、寄稿者に配布される程度の少部数発行であったと思われる。

編集発行人は、創刊号のみ赤尾光雄（武田泰淳の従兄）。二、四号は武田泰淳へと変更。それに伴い、発行所住所も、本所区千歳町二ノ一八から、当時泰淳が居住していた長泉院の所在地である、目黒区中目黒一丁目七三四へと移されている。（書影2、3参考）

同誌は現在四号（昭和十二年七月三十一日発行）まで確認。終刊時未詳。同誌第四卷「編集後記」には「次号締切は八月末日」との続巻発行の予告があるものの、編集発行人の泰淳が昭和十二年一〇月に応召、中支に派遣されるため、以後中断、廃刊になった可能性もあろう。

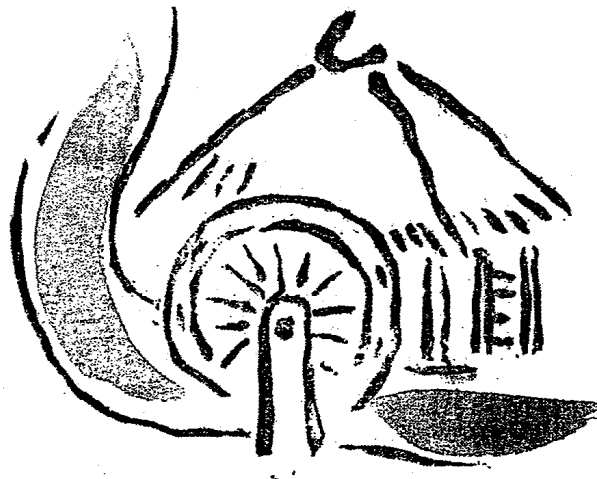
なお『艸屋』は日本近代文学館にその所蔵が確認できる。ちなみに同館所蔵本には「武田百合子氏寄贈」の印があるため、泰淳の旧蔵書であったことがわかるのだが、さらに

特筆すべきは、俳号の下にその作者の本名を示す書入れがなされていることである。たとえば創刊号には「沙通」の下に「武田」と書入れがあり（書影4参考）、これは泰淳の俳号が「沙通」であることを証言していた藤田寛海氏の言を資料的に補強するものともなっている。またこの書入れは泰淳のことを「武田」と呼んでいる点からみて、武田泰淳夫人である百合子氏の手によるものであると思われる。雑誌刊行当時、泰淳と百合子氏の間に面識はない。そのためこの書入れは雑誌刊行時よりかなり以後になされたものということになる。その点では書入れ内容の精度に問題がないともいえないのだが、投稿者と武田の交流が戦後まで続いていたとするならば、夫人の手になる書入れにも一定の信頼性を認めることができる。したがって、今後の武田研究において、『艸屋』は泰淳周辺の人物関係を推測させる重要な手がかりになるものだともいえよう。

2 刊行の経緯と方向性

ところで、この雑誌はいかなる経緯で刊行されたものであろうか。

艸屋



1

(愛 非)

昭和十二年二月廿五日印刷
昭和十二年三月一日発行
艸屋第一巻第二号
編輯 武田泰淳
発行所 目黒区中目黒二丁目三番
艸屋社
電話 四五二番

書影3 第一巻第二号奥付

(品 賣 非)

昭和十一年十二月廿五日印刷
昭和十二年一月一日発行
(第一巻第一号)
編輯 武田泰淳
発行所 目黒区中目黒二丁目三番
艸屋社
電話 四五二番

書影2 第一巻第一号奥付

枯れがら花 目黒 沙
ドブに落ち枯木浮かぶ街に住む
雲に似て煙草のかゝる 枯木かな
枯木路 今年の風の残りたる
枯木 小さくすぐ拾はれて街暮れぬ

通 武田

—10—

書影4 書入れ (第一巻第一号)

管見するところ、『艸屋』に関する泰淳自身の言及はほとんどない。ただ『艸屋』創刊号巻頭には、「△『艸屋』は同族・親類の句集である」という言葉があり、藤田寛海氏も「昭和九年か十年頃、泰淳の従兄と氏（＝寛海氏 木田注）の兄上、泰淳の兄上と泰淳の五人で、俳句の会」を作っていたことを証言している。^(注4)このあたりの事情を勘案すると、『艸屋』は、泰淳従兄の赤尾光雄氏、藤田寛海氏

とその兄の藤田寛雅氏、泰淳兄の大島泰雄氏、そして泰淳の五名が中心となった俳句サークルの機関紙として計画されたものだと思われる。しかし周知のように、泰淳周囲で俳句に興じていたのは右記の各人だけではない。先述の長田論が指摘した大島泰信の俳句趣味を筆頭に、泰淳の母つる子もたびたび泰淳を伴い、幡随院住職神林礼堂に句を習いに行っていたとされ、一族の集まりでも頻繁に句会が催されていたことも証言^(注5)されている。泰淳周辺において、俳句はいわば基本的教養として位置づけられていたのであり、『艸屋』はこうした一族全体の要請によって発行されたと考えられる。

つまり『艸屋』は、泰淳の兄弟親戚関係を中心とするきわめてドメスティックな性格を有した雑誌であったと位置

づけられるのである。ただその一方で、この雑誌の持っていた性格が、泰淳が編集を手がける第二号から変化しはじめていくことには留意しておくべきかもしれない。

第二号「編集後記」には、「第一号（艸屋人）と比べると「三句集」の顔ぶれは著しく変化した（中略）新しく銀行・実験場・学校などからの句が加わった。逐号各方面から玉稿を頂戴して愈々盛大にしたい」という言葉がみえる。この編集後記は無署名であり、泰淳のものと即断はできない。ただここに編集発行人である泰淳の意図が少なからず反映されていると理解するならば、この言葉は、『艸屋』を家庭内雑誌から投稿俳句雑誌へと転換しようとする、泰淳の指針表明であったとも理解できるかもしれない。

実際第二号以後には、創刊号になかった「三句集」という外部投稿欄が設けられ、右記の編集後記にあるように父大島泰信の勤務先である大正大学、兄大島泰雄の勤務先である東京帝国大学水産臨海実験場の関係者からの投句を受け入れている。また第三号では東北、九州など、遠方からの投句があり、神林時處人^(注6)、尾崎迷堂^(注7)など、当時すでに俳人として一定の地位を確立していた人々の句も収録するなど、刊行を重ねるごとに、投稿俳句雑誌としての実質を整

える動きを看取することができるのである。

3 中国文学研究会のアンチテーゼとして

このように、一族内の要望を充足させる媒体であった『艸屋』を、泰淳はやがて一般にも門戸を開く投稿俳句雑誌として展開することを目論んでいたことが推測される。もちろんこうした方向性は、雑誌が内容充実をはかる際に自然に取りうる流れでもあるのだが、この『艸屋』の方向性に同時期の泰淳の個人的事情を重ね合わせてみるならば、そこには泰淳文学の成立を考える上で看過できない問題が含まれているようにも思われる。

『艸屋』編集時代の泰淳は、一方で竹内好らとともに中国文学研究会の創立メンバーとして会の方向性を決定する位置におり、機関誌『中国文学月報』(後、『中国文学』)の編集にも中心的な役割を果たしていた。同時期の泰淳が中国文学研究会を文学的、精神的拠点としていたことはいうまでもないが、実はその中国文学研究会は、同時期、分裂の危機を迎えていた。

立間祥介編「中国文学研究会年譜」^(注8)によれば、「元来ア

カデミズム否定から出発したこの研究会に、このころ同人の一部から『月報』をよりアカデミックなものに近づけようとする意見が出て来」た結果、会の方針をめぐる内紛が発生。八月ごろまでに同人数名が退会するという事態が発生している。この内紛の経緯については、現在のところこれ以上のことは確認できず、内紛の発生時期や会員の動静に関してもよくわからない。ただ、これら内紛劇に先立つ昭和十二年一月発行の『中国文学月報』第二二号「後記」には、その発生要因を推測させる告示が記されている。

例会改組について

例会の不振を批判し、改組を決定しました。即ち現在の例会は当初の意義を失ひ、研究会活動の発展に置換へられてゐること、従つて今後は各研究会の総合と、より社交的、親睦の意味を有つべきであると認めます。一方、同人会は協議を除いては特殊の必要を失ひつゝ、あり、広汎な活動のために組織の拡充を計るべきであります。よつてこの際、両者を合一し、今後の例会は月報の批判、意見の交換などを公開的に行ふと共に、自由に談話し、愉快に会食し、そこから互いに啓発する「中国文学研究会の雰囲気」を醸成するやうに努めたいと希望します。(後略)

中国文学研究会発足当時、会はその目的に「日中文化の交驛」を標榜し、周作人・徐祖正を招待するなど、日中の人物、文化的交流を推進する方向性を強く打ち出していた。しかし先の引用にある「現在の例会は当初の意義を失い、研究会活動の発展に置換へられてゐる」などの発言を逆説的に読むならば、この告示が出された昭和十二年一月の時点で、すでに会がアカデミックな研究集団としての色合いを増していたことがわけるのである。

つまりこの改組の告示は、研究会が中国文学を伝統的漢学などの閉鎖的な学問領域へ再吸収しつつある現状を憂えた、竹内、泰淳ら創立メンバーによる方向性の再確認でもあったと思われる。そしてこの例会改組の告示が出された昭和十二年一月はまさに『艸屋』が発刊された時期であり、以後中国文学研究会会員の脱退が起る昭和十二年八月頃までの間で、泰淳は『艸屋』のもつ同族雑誌という閉鎖的性格を改善していくのである。この同時期に二つの雑誌が取った対照的な動き。ここに関係性を見出すのは付会にすぎだろうか。

泰淳は『艸屋』「編集後記」に、「今後も草屋はカメレオンの如く変化するかもしれない。混乱して変化する雑然た

る句集こそ、電子にも似て自由に存在しうる」(第二号)、「私共は一定の形式を主張しません」(第三号)と記している。この言葉の裏に同時期の中国文学研究会の動向を重ね合わせるとき、この「変化し」、「決まった主義主張を持たない」とする『艸屋』の編集方針はまた、保守化やアカデミズム化が進行し始めた中国文学研究会へのアンチテーゼとして書き付けられたとも思われるのである。

4 『艸屋』の位置—泰淳俳句の特色から

そのように考えると、泰淳にとって、『艸屋』は『中国文学月報』と表裏一体の関係をもった媒体であり、同時に旧来の俳句雑誌に見られるような結社性や俳諧理論に縛られることのない自由な表現の場として意識されていたといえるのである。むしろそれは、理論ではなく同族間の精神的紐帯によって成立していた『艸屋』の体質的な弱さの裏返しである点は否定できない。しかし今、付会を承知で、この無理念、無拘束性を『艸屋』の創作理念であると読み替えてみるならば、これら『艸屋』の理念は、泰淳の俳句とどの程度と一致し、後の泰淳の文学的営為にどのような

影響を残したと考えられるのだろうか。

現在残されている資料を見る限り、泰淳が活字化された媒体で俳句を詠むことは少なかった。だが、私信などでは頻繁に俳句を記しており、特に『艸屋』編集活動直後に派遣された中支戦線からの私信においては、感慨を表現する手段として頻繁に俳句が織り込まれている。

泰淳の従軍俳句に関するほとんど唯一の発言者である島野博子は、これら俳句の特色を「飘逸」の一語で評した。そしてこの「飘逸」さは「おかしさを装うという俳句の表現の性格に」かわって誕生したものであり、その背景に「戦時下の言論統制」の影響があることを読みとっている。^(注9)

戦地郵便に対してなされた検閲などを勘案すれば、島野の立論はある程度首肯できる部分はある。しかし、『艸屋』掲載の泰淳俳句をみると、この「飘逸」さは、むしろこの雑誌に投句する中で培われた従軍以前からの特色であったといえるかもしれない。

『艸屋』掲載の泰淳俳句は、基本的には有季定型といった標準的な様式をもったものが多い。しかしその一方で、たとえば『艸屋』第一号に発表された「枯れざる花」の「枯木君師走の塵の味よきや？」のように、枯木を「君」

と呼ぶことで擬人化し、そこにクエスションマークを添えることによって、無生物への問いかけというユーモアを視覚的にも強調する手法を用いたものもある。また第三号発表の「ブランコとトコロテン」の連句は、一、二句でブランコ、トコロテンという一見無縁な対象を提示し、最終句においてその両者を「揺れる」という言葉で取り合わせるなど、一種のコントめいた構成が感じ入られ、同時に、子供がブランコから落ちて白目をむく様子や、熱いうどんを冷ますために息を吹きかける表情など、ナンセンスな対象を、ブランコ、トコロテン、ヒョットコといったカタカナ語と取り合わせることによって描き出す、モダンイズム俳句にも似た手法も看取できるのである。

俳句に疎い筆者には、これら泰淳俳句の技巧的完成度を云々する技量はない。そのため今述べてきた泰淳俳句の試みを俳句技法史のなかに置いたとき、実はこれらは冗句や戯句の類として一蹴する程度のものなのかもしれない。ただたとえばそうであったとしても、『艸屋』における泰淳俳句には、先の編集後記の言葉のように「カメレオンの如く変化する」さまざまな技巧的冒険を確認することができ、同時にその技巧こそが、泰淳俳句の飄々としたおかしみを

支えていることはうかがえる。従軍俳句の「諧謔」はまさにこの『艸屋』での表現の試みに立脚しているのである。それは、『艸屋』が泰淳における表現の実験場として機能していたことも示しているよう。

そしてこのことは、泰淳の〈従軍体験〉の位置づけにも揺らぎを与えるかもしれない。竹内好を始め、従軍体験が後の作家的基盤を形成する内面的変化をもたらし、文体上の変化を生んだことを指摘する考え方は多い。^(注10) かくいう筆者もまた、同様の見解を発表したことがある。^(注11) しかし表現の研鑽という側面に立ち返ったとき、従軍体験は泰淳にいかなる訓練を課すことができたのだろうか。感じ取ったものをいかように表現するか、その表現方法の形成過程について考えたとき、従軍直前になされた『艸屋』での俳句活動は、後の泰淳の文学的模索とも無縁といえないのではなかろうか。

『艸屋』は、またたしかに武田泰淳の文学的基盤を形成したのである。

▼『艸屋』細目

以下、『艸屋』各号の細目を挙げる。巻頭言、編集後記等の記述は全文掲載とし、俳句は、紙幅の都合上、題名だけを記した。各題名の下のアラビア数字は掲載頁を、□は判読不能を表わす。なお、資料的価値を鑑み、日本近代文学館所蔵本の書入れを、該当箇所〈山括弧〉でくくって表記し、武田泰淳（沙通）の俳句に関しては、細目の後に一括して全文掲載した。

艸屋 第一巻第一号

【奥付】

昭和十一年十二月廿五日印刷、昭和十二年一月一日発行

行

編輯発行人 赤尾光雄（本所区千歳町二ノ十八）

発行所 艸屋社（本所区千歳町二ノ十八）電話（73）

二〇九七番

非売品

【本文】

○巻頭言

1

△「艸屋」は同族・親類の句集である。

△「艸屋」は老年から少年まで、年齢順に十句づゝの句をおさめる。

△「艸屋」は人生のやうに一つの主張をもつにはあまりに複雑である。

艸屋 第一卷第二号

【奥付】

昭和十二年二月廿五日印刷、昭和十二年三月一日発行
編輯発行人 武田泰淳（目黒区中目黒一丁目七三四）
発行所 艸屋社（目黒区中目黒一丁目七三四）電話
（44）七五二番

非売

【本文】

○艸屋 三句集

南天

高峯空方

2

雪

神林時處人

1

頭巾

轉法輪百老

3

耳を病む

宝樹六三庵

4

雪

大島都留女

4

冬ごもり

神林菖十

5

ペルシヤ猫

赤尾嘉命

5

星

渋谷白浪子

6

霜柱

山田如秋

6

雑詠

目黒 空方

〈大島泰信〉

2

霧と行く

目黒 都留女

〈つる子〉

4

冬

両国 嘉命女

〈赤尾かめ〉

6

街路樹

両国 雪嶺

〈光雄〉

8

枯れざる花

目黒 沙通

〈武田〉

10

閑古鳥

鴻の巣 雷三

〈寛随〉

12

風呂吹

鹿兒島 まゆり

14

冬の日

目黒 大龍

16

凍道

神田 信一

18

短日

佐賀草芝

水族

大島八艸

秋の匂ひ

岡崎白想人

悪夢

赤尾雪嶺

銀行

玉木紙平

病中吟

藤田寛

猿の国

武田沙通

犬抱けば

藤田まゆり

○艸屋集

水洩

高峯空方

突羽根

大島都留女

女

赤尾嘉命

海鼠

大島八艸

吹雪の夜

赤尾雪嶺

南の島

藤田寛

お正月

佐藤治子

冬の象

武田沙通

蒲団干す

藤田まゆり

7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

○編輯後記

21

・第一号（艸屋人）と比べると「三句集」の顔ぶれは著しく変化した。年齢順にならべた事は変りないが、新しく銀行・実験場・学校などからの句が加はった。逐号各方面から玉稿を頂戴して愈々盛大にしたい。更に「草屋集」の同族の作風も変化しつつある。今後も草屋はカメレオンの如く変化するかもしれない。混乱し変化する雑然たる句集こそ電子にも似て自由に存在しうる。

艸屋 第一卷第三号

【奥付】

昭和十二年五月五日印刷、昭和十二年五月十日発行
編輯發行人 武田泰淳（目黒区中目黒一丁目七三四）
發行所 艸屋社（目黒区中目黒一の七三四）電話（44）
七五二番
非売

【本文】

○艸屋 三句集

鳩	高峯空方	2	1
芭蕉の芽	神林時處人〈周道〉		
眼鏡	轉法輪百翁	3	
春雨	玉木六三庵〈拾話□〉		
ゆるき梯子	渡辺小折	4	
トカゲ	大島都留女		
朝寝	玉木竹堂	5	
海	赤尾嘉命		
聾啞の国	神林莒十	6	
姫辛夷	山田如秋		
煙の輪	大野春江女	7	
若葉	田丸登久坊		
彼岸	渡辺夢想	8	
太鼓	三枝樹翠空		
落花	渋谷白浪子	9	
山鳩	高橋義人		
弓月	高橋美沙梧	10	
籬落	尾崎迷堂		

○艸屋集

行列	佐賀草芝	11
田螺と蛙	坂野五鈴	
旅愁	大島魚棚子	12
春宵	赤尾雪嶺	
せりつみ	佐藤治子	13
日曜スナップ	玉木紙平	
電車	武田沙通	14
木の芽晴れ	大野星宝	
卓の上	長生俊良	15
麦を踏む	越地晃月	
古き雛	大野千枝女〈大野伝随長女〉	16
スカート	大野英女〈次女〉	
馨	高峯空方	17
赤い帽子	大島都留女	18
雀の子	赤尾嘉命	19
雑句	大島魚棚子	20
酸模	赤尾雪嶺	21
ブランコとトコロテン	武田沙通	22
		23

椿

佐藤治子

24

木市

藤田マユリ

○後記

△皆様の御援助で小さいながらも楽しい艸屋になりつゝあります。東北からも九州からも句をいたゞきました。一度投句された方かならず引きつゞきお願いします。

△私共は一定の形式を主張しません。どんな平凡なもの、どんな奇抜なものでも結構です。
△次号三句集の締切は六月十五日です。

艸屋 第一卷第四号

【奥付】

昭和十二年七月卅日印刷、昭和十二年七月卅一日発行
編輯發行人 武田泰淳（目黒区中目黒一丁目七三四）
發行所 艸屋社（目黒区中目黒一丁目七三四）電話

（44）七五二番

【本文】

○三句集 会友自選

追悼	高峯空方	2
長養	尾崎迷堂	3
葉	神林時處人	4
学帽	轉法輪百翁	5
卯月	玉木六三庵	6
片目の小猫	大島都留女	7
紅薔薇	渋谷白浪子	8
若葉窓	真野朱山人	9
月見草	赤尾嘉命	10
夏野	小田原葭風	11
五月雨	諸能一字	12
藤の花	鈴木白山	13
夏霞	瀧水亭（山本哲成）	14
午睡	藤田鴻村	15
紫陽花	豊田天恵女	16
鯨	大島魚棚子	17

涼風

坂野五鈴

蜥蜴

藤田まゆり

25

浜祭

内山櫻溪

11

水の垢

石黒松葉

12

樹影

三橋松童

13

蟹

小杉夢一遊

14

汗

白田吟浪

15

狭き蚊帳

岡崎白想人

16

泳ぎの児

赤尾雪嶺

17

晝

武田沙通

18

蟻

三橋寢草

19

蝙蝠

藤田まゆり

20

○艸屋集

茱萸

高峯空方

21

川沿いにて

大島都留

22

南洋果

赤尾嘉命

23

ぶんぶん雑句

大島魚棚子

24

夏の海

赤尾雪嶺

25

初夏清陰

藤田鴻村

26

湖にて

武田沙通

27

武田泰淳と俳句雑誌『艸屋』の周辺

○後記

◆暑中御見舞申し上げます

◆毎号熱心な御投稿を感謝します。同人も起きつ轉び

つ勉強いたします。

◆次号締切は八月末日

▼武田泰淳（沙通）『艸屋』掲載俳句一覽

枯れざる花（第一号所収）

ドブに落ち枯木浮かざる街に住む

雲に似て煙草のかゝる枯木かな

枯木道今年の風の残りたる

枯木小さくすぐ拾はれて街暮れぬ

騒音はビルの旗より枯木まで

おろかしく気球あがりて枯葉落つ

塵の花鼻紙の花枯れ得ざる

酔ひ痴れて暗の枯木に抱かれぬ
枯木君師走の塵の味よきや？
枯木道霜吸ふ石の何處までも

猿の国 (第二号所収)

猿の国鴉の影にざわめきぬ
白熊の割に小さき輪を歩き
うづくまる駱駝の年の知られざる

冬の象 (第二号所収)

菓子喰ひてやゝ喜びし冬の象
冬象の尿に見る人すぐ去りぬ
狼の待屈なるか横眼する
獅子の兒の一つは弱し冬の晝
アラヒグマゆたかなる毛あり満ち足らぬ
馬類のみな南むく柵ありぬ
大山羊の嚏に子山羊おどろきぬ

電車 (第三号所収)

橋渡る灰色電車にいねむりぬ

南方に潮騒のして花を買ふ
春の夕禁断の書を失ひぬ

ブランコとトコロテン (第三号所収)

トコロテンの店にふくれしトコロテン
ブランコを落ちて子供は白眼する
ウドン喰ひて顔丸くなる櫻の夜
春雷にヒョットコ面は黄色にて
テント垂れてテント落ちたり古櫻
空中に花浮く園の鼠の子
ブランコはトコロテンよりよく揺れる

晝 (第四号所収)

瓜虫の飛ぶ晝雲の小さくて
瓜虫をとつて冷たき蔭へ行く
裂けし葉はそのまゝ花に夏の草

湖にて (第四号所収)

焼石の水底に積み水澄みぬ
ボート乾して藻の花多き湖と知る

誰もゐない焼石濱に棒持ちて

晝顔の急に大きく土手崩る

ボンヤリと湖水に潜り泡を見る

×

何か買ひたい街は遠くて螢のみ

注

(1) 島野博子「武田泰淳と俳句―藤田寛随師宛書簡を中心に」

『国語国文学研究』第二一卷（一九八六・二）

(2) 長田真紀「武田泰淳研究―父大島泰信の俳句」『学海』一五号（一九九九・三）

(3) (1) に同じ。

(4) (1) に同じ。

(5) この一文は (1) に拠る。ただし、つる子が句を習いに行っていたのは、実際には神林礼堂ではなく、『艸屋』にも名前の見える神林周道（時處人）の可能性もある。神林周道については (6) を参照。

(6) 本名神林周道（一八七六―一九四七）。字は時處人。浄土宗僧侶。大橋俊雄『浄土宗仏家人名事典近代編』（一九八一・一一 東洋文化出版）に、「（大正）一〇年三月大磯鴨立庵に入って仏道精進の傍ら俳句に専念して大磯町のみならず、その近隣の人々の俳句熱を高め」とあるように、『艸屋』発行当時の俳句界では一定の知名度を持った人物

武田泰淳と俳句雑誌『艸屋』の周辺

であった。なお同氏は、鴨立庵と同時に東京市芝公園近くの松連社にも居住しており、泰淳とつる子はこちらに俳句を習いに行っていた可能性もある。

(7) 本名尾崎光三郎（一八九〇―一九七〇）。僧名は暢光。俳諧は松根東洋城に学ぶ。『洪柿』三羽鳥の一人。昭和一〇年には『あら野』の創刊に参加するなど、『艸屋』刊行当時、俳人としてすでに多彩な活動をしていた。

(8) 立間祥介編「中国文学研究会年譜」（『復刻中国文学別冊』一九七一・三 汲古書院）

(9) (1) に同じ。

(10) たとえば竹内好は「座談会武田泰淳―その仕事と人間」『近代文学』一九六〇・七・八）席上、武田の文章の変化について、「（戦地から）帰ってきてからというよりも、むしろ兵隊にいついて書いて書いてくるものね、手紙なんかも非常にちがうのです。文章がちがったですよ」と証言している。

(11) 拙稿「武田泰淳の従軍期―従軍中著作を視座として」『日本言語文化研究』一九九九・三）

※なお、『艸屋』の閲覧および複写、本稿への掲載に関しては、日本近代文学館にご配慮を賜った。記して謝意にかえたい。

（本学文学部特任講師）